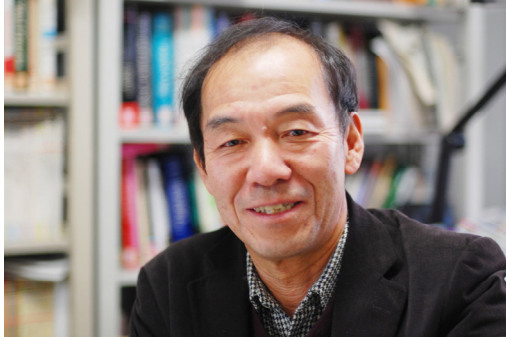


## お礼と雑感

村田 純一



まずは私のような者の名を付して退職記念号を発行することに対して、感謝を申し上げます。本当の気持ちは、「お恥ずかしい、面映い、照れくさい」のですが、これが恒例となっているので、あえて辞退するよりは、お受けした方が、皆様のためになると考えました。

3月に前代未聞の「おちゃらけた」最終講義をしてしまい、私の「浅学菲才」さが露呈しましたが、ここでさらに恥の上塗りになるかもしれませんが、外大の33年間で終えた今の心境をここに記したいと思います。

研究者としては3流(4流?)ですから、「大きな業績、特になし」。教育者としても3流(4流?)ですので、「大きな感激、さしてなし」。

ただただ、「英語を教えるとは何か」を考えつつも、「教える前に英語を学び、身につけなければ」と必死に33年間苦しんできた、というのが正直な気持ちです。もちろん、そのためには、健康第一ですので、スポーツにも勤しみました。

それにしても英作文の指導で添削の時間は、多い時は外大での勤務時間の50%を超えていたかと思います。若い時は「いつかネイティブのように添削もあつという間にできるようになる」と願いつつ、とうとう、65歳になり、あまり変わっていない自分に気づくことになりました。

ただ、若い時には、60過ぎたら、頭も体も老化し、教壇に立つのも辛いだろうと恐れていたのはどうやら杞憂のようで、「まだまだやれそう」というのが実感です。(「それが老化の症状だ」と言われそうですが。)

4月からも、有り難いことに、非常勤として雇っていただき、仕事量が2分の1になり（給料は5分の1ですが）、余裕を持って過ごしております。昔（50年くらい前）の大学の先生はこんな生活だったのかなあと思い、未解決のテーマの研究に力を入れてみようか、などという思いも湧いてきました。

5年くらい前から、「1日も早く退職したい。」「1、2年早く退職しようか」と思っていたことが、今では嘘のように思えます。人間やはり余裕が大事なのか。いや、やはり、追い詰められるくらいでないとダメなのか。この一年、自分の研究意欲や教育への情熱がどう変わるか。これもある種の研究なのかもしれません。

末筆で失礼ながら、また、本人は退職という実感が湧かないのですが、退職記念号に執筆された先生方と編集に携わった先生方のご健康とご活躍を祈りながら、お礼とさせていただきます。本当にありがとうございました。

2019年 5月 1 日